

奨励金を受賞して

奨励金贈呈の対象者になるには研究環境の条件を別にすれば、これまでに取り組んできた調査・研究の成果がある程度問われ、また一方では、自選も含めて推薦していただける上司や仲間の会員が必要である。若い会員の場合は今後の飛躍に大きな期待もあって推薦されるが、今年度受賞した私の場合は、年齢的に考えて過去の成果に対しての評価が80%、今後への期待が20%と解釈している。

そこで、私のこれまでの経験を基に、個人的に、また自発的に、調査・研究に取り組むときの人的な体制について提案し、さらに、調査を行うことによる「功」を述べて、奨励金受領のお礼としたい。

私の調査・研究への取り組みは、職場（気象官署）の先輩の姿を見てきた影響が大きい。中でも印象が強い先輩諸氏は、若い時分には、管理している測候所の観測値の矛盾からくる疑問を調査・提起され、観測精度の維持・向上に取り組まれた森国広旧会員（当時油津測候所長）、調査手順等の指導を受けた城間恒信旧会員（当時福岡管区気象台予報官）、近年では、気象災害発生時等の現象解析に取り組み1994年度奨励金を受賞された前田宏会員（元福岡航空測候所長）である。この先輩たちは、常日頃の気象観測値を注意深く観察し、また、気象現象の発現について予報者として解析し、論文にまとめられている。

多くの場合、何かに挑戦しようとするときは、先人の物まねから始まるといわれる。私の場合も同様で、多くの先輩の成果、手法をずいぶんと参考にさせていただいた。以前は1人でちまちまとまとめていたが、最近は多量のデータ・情報をより有効に活用するため、情報処理技術にたけた同僚と2人で取り組んでいる。しかし、今改めて周囲を見渡すと、気象関係のデータや情報、調査・研究論文の多さ、専門化・多様さからして、研究を業務としていない私たちの今の調査環境では、とても1人で処理できる物量ではない。

このような状況下での調査・研究は、複数人数で取り組まざるを得ないとする。具体的には、調査の目

的、アルゴリズム等を担当し総括する人、過去の文献から情報を得、かつ重複のチェックを担当する人、パソコン等でデータの処理を担当する人、のできれば少なくとも3人が必要と考える。このような体制を必要とするのは、取り組んだテーマと結果が過去の文献と重複していたり、結果に発展性がなければ、労力が無駄になるためである。また、膨大なデータを効率的に処理し、結果を速やかに生かすためである。

つぎに、調査を行うことによる「功」には、次のようなことが考えられる。自発的に調査に取り組むことは、まず、

- ①課せられた仕事とは別に目的を持つことになり、大変な面はあるが充実した毎日となる。
- ②テーマに関係する過去の文献に触れることで、多くの知識が得られる。
- ③論文としてまとめられれば、考えを文章にする訓練になる。
- ④研究会等で発表することになれば、自分の意見を言葉で表現する貴重な経験ができる。
- ⑤同様のテーマを持つ友も増えてくる。

等々があり、さらには奨励金を頂き美酒に酔える可能性もある。これらはすべて、仕事上も非常に役立ち、また、自分の自信につながる。

今回頂いた奨励金は、当然ながら今後の調査・研究の一助とするが、一部は先輩や同僚と美酒に酔った。また、共同で調査している同僚にもおすそ分けをしたところ、すぐに今話題の Windows 95 に化けたようである。これでも、私の無理な要求に今まで以上にすばやく、各種データの解析資料が届けられるようになりそうである。

最後に、推薦していただいた関係者の皆様に感謝しますとともに、受賞を励みとして、今後も調査・研究に取り組みたいと思います。

“成功するか失敗するかは、賢明な助言を実行するかどうかによって決まります。”

会員の皆さん、アクティブにレッツ チャレンジ。
（佐賀地方気象台 中吉 一行）